



日本学会議会議長

黒川 清

腎臓学のMajor Leagueへようこそ

今年の米国腎臓学会(The American Society of Nephrology;ASN)は、Renal Week 2004の一環として、約11,000人の参加者を集めて、10月27日～11月1日の6日間、セントルイスにて開催された。セントルイスは、開拓時代には西部への玄関口であり、それを記念する巨大なゲートウェイアーチが有名である。それに加えて、今年はカーディナルスがワールドシリーズに進出したことも忘れるわけにはいかない。早めに出発した人たちの中には、ブッシュスタジアムでの試合を楽しんだ人もいたのではないだろうか。

今年採用された一般演題は応募4,117演題中3526題(採択率85%)であり、その44%が海外からの発表だという。その水準の高さだけでなく、世界から精鋭が集うさまは、まさに腎臓学のMajor Leagueと言って良いであろう。そしてここでも、日本人の活躍が年々確実に目立つようになってきた。

プログラムによると、抄録の査読者として、市川、松尾、南学、岡田、深川、藤乗の6氏の名前が挙げられている。また、シンポジウム、一般演題のfree communication(わずか315題、つまり応募中7.7%)および座長のリストには、約30名の日本人の名前がみられる。この他、毎日1,000題以上行われたポスターでは、数えきれない数の日本人が活躍していた。

セッションの構成も、20～30年前のASNが基礎的研究を対象としたセッションが圧倒的に多かったころにくらべると今昔の感がある。シンポジウム、free communicationともに、透析も含む臨床のセッション、教育的セッションが多数設定されている。また、従来からのイブニングシンポジウムに加えて、今回は毎日ランチオンセミナーも多数行われ、一つだけ朝6時すぎから行われたモーニングシンポジウムも含めて、すべて大盛況であった。これは、会場のまわりのダウンタウンに食事する場所が少なかったせいだけではないようである。とりあげる内容が、2型糖尿病患者でnormoalbuminuriaからmicroalbuminuriaへの進行に対するACE阻害薬の作用を検討したBENEDICT study(N Engl J Med 351: 1941-1951,2004) など、最新の臨床の話題であったことによると思われる。やはり学会の中心は臨床家なのである。

さて、この学会では、会頭演説で学会としての今後の方針が明確に示されるのが通例である。これは、腎臓病の治療戦略や、学術集会、学会誌の方針と現状などの学問的事項のことだけにとどまらず、教育、研究費、そのためのロビー活動、さらに果たすべき社会的役割など多岐にわたる。このようなことを、学会初日朝一番の最も人の集まる時間帯に発表することは、日本では考えられないが、学会が何を目指しているかが、全員に伝わると言うことはきわめて重要と考えられる。これが会長職の役割なのであって、自分の研究の成果は既に論文等で知れているわけ

で、そんな事を話しているようでは何のための会長かといわれようというものである。日本でもいろいろな学会があるが、日本の学会会長たる人にはこの点をよく考えてもらいたい。

さらに、教育も含め、それぞれの分野で活躍する人に対して、いずれも高い評価が与えられ、本人たちもそれを誇りに思っていることも特筆すべきといえよう。もちろん、このような役につくのは一定の水準をクリアした人たちに限られるが、日本のように評価が減点法でないということでもある。

毎朝のプレナリーセッションの最後にはState-of-the-Art Lectureが行われる。初日は皆さんにおなじみの昨年のノーベル賞受賞のAgre博士によるAquaporinの話、2日目は、くしくも本年度のノーベル賞の対象になったubiquitin-proteasome pathwayの話が取り上げられるなど、サイエンスに関する嗅覚にもいつも感心させられる。どうも、色々な面で、まだ「野球」と「ベースボール」の間にはかなりのへだたりがあるようである。ノモ、イチロー、マツイがいつでるか期待したい。

来年はフィラデルフィア、再来年はサンディエゴと、おなじみの土地が続くが、今後も世界最高のフィールドで若い人たちが縦横無尽に活躍するのが、目にみえるようである。しかし、日本の腎臓を背負う人たちにはこれからの世界の動きの中での責任も考えてほしい。日露戦争100年、太平洋戦争敗戦、そして20世紀後半に世界第2の経済大国になり、21世紀に元気がなくなりつつある日本。これからの国家目標はなにか。それは歴史的にも、文明史的にもアジアでの信頼の再構築であろう。アジアに信頼されない日本をヨーロッパ連合、アメリカ大陸が信頼するだろうか。「国家の品格」の問題なのである。人間を見てもわかると思うが、どんな人とお付き合いしたいのかなのである。それには「ソフトパワー」である将来の人材の育成である。日本腎臓学会もそのような国際社会での社会的責任を積極的に果たしてほしいものである。アジアの国々は待っている。世界もそれを期待している。



出典：ASNコンgresレポート - 中外製薬（株）ホームページより
[ASN (American Society of Nephrology:米国腎臓学会)]